中学部 国語科 授業づくりの考え方

発表者：藤並 寛子

授業づくりの工程

- 前題材までに到達している実態を把握
- 子どもに望む姿を想定
- 指導内容の決定（研究生産物を基に）
- 学習指導要領の指導内容から段階を決定
- **題材目標の決定**
- 教材の設定
- 題材設定の立場記述
- **題材計画構想**
- 授業構想シートを活用
- **本時案作成**
- 題材開始
- R研で毎時間の授業の評価・改善
- 題材終了
- 観点別評価の実施

実践事例

指 導 内 容 ： 小学部3段階 読むこと 知識及び技能：ア（オ） 思考力・判断力・表現力等：イ

教材と仕組み：『附特工房で製品を作ろう！』で、「はじめに、●の▲を◇の▽に貼ります。」などの説明文を読み取り、その通りに作業して製品を作る

題材目標

知 ・ 技 ：『トレーニング』で、「はじめに、●の▲を◇の▽に貼ります。」「つぎに、△と□を●の下に貼ります」などの説明文を読むとき、順序を表すことば（「まず」「次に」「その次に」「それから」「そして」「最後に」）や助詞（「を」「に」「の」「と」）の使い方を知り、 正しい手順を読み取る

思・判・表：『附特工房で製品を作ろう！』で説明文を読んで製品を作るとき、順序を表すことばを四角で囲ったり、助詞「を」「に」「の」「と」に印を付けたりして文章を読み取り、説明文通りの製品を作る

学 び ：自分から説明文を読み、説明文通りの絵を描いたり、製品を作ったりする

評価規準

知 ・ 技 ：「まず、[A ●の▲]を[B ◇の▽]に～する」や「最後に、[A ●と■]を[B △の（位置）]に～する」の文章を読むとき、順序を表すことばや、「の」や「と」の前後のことばが一つのまとまりとなること、「Aを」が「Bに」に到達することがわかった

思・判・表：「赤のシールをコップの点「・」に貼ります」や、「ピンクのシールと白いシールを画用紙の上に貼ります」などの短文を読むとき、説明文に線を引いて思考を整理し、文章で示された通りの製品を作ることができた

学 び ：自分から説明文を読み、説明文通りに行動する様子が見られた

学習指導要領の内容から三つの柱の題材目標を決定する経緯と整合性の根拠

ポイント これからの生活に役立つように

実態
- ・分かち書きをした文章から「誰がどうした」「何をどうする」を読むことができる。
- ・「AにBを貼る」の文章を読んで行動するとき、BにAを貼る。

助詞の使い方を理解し、将来の生活に向けて、簡単な説明書などを読んで、自分で行動できるようになってほしい

【知識及び技能】
ア 言葉の特徴や使い方
（オ）文の中における主語と述語との関係や助詞の使い方により，意味が変わることを知ること

【思考力・判断力・表現力】
イ 絵本や易しい読み物などを読み，時間的な順序など内容の大体を捉えること

知識及び技能と思考力・判断力・表現力等のそれぞれの内容の高まりやつながりについて

ポイント スモールステップで少しずつ

【知識及び技能】
- ・文章を読むことを楽しめるように、はじめは扱う助詞の数や一文の長さを少なく設定し、徐々に増やしていくようにした。（右表参照）
- ・説明文を構成する文章の数を、「まず」「次に」「最後に」の順序を表すことばを用いた3つの文章から読むことをはじめ、徐々に文章量を増やしていくようにした。

【思考力・判断力・表現力】
- ・知識及び技能で学習した内容を正確に読み取るために、順序を表すことばや助詞に印を付けながら読むようにした。（下記働きかけの工夫参照）

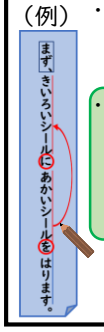
	一次		二次				三次	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
助詞							「を」「に」「の」「と」	
		「を」「に」		「を」「に」「と」		「を」「に」「の」		
文例		まるに シールを はる		まると さんかくを はる		あおいひもを かっぷの あなに とおす	かみこっぷの そこに まるいシールと しかくいシールを はる	きいろいシールと あおいシールを しるしの うえに はる
		シールを まるに はる		がようしに はる		ほしの カードと ハートの カードを はこに いれます	かごに りんごの カードと みかんの カードを いれます	

三つの柱の目標を達成するための働きかけや工夫

ポイント 「読んだからできた！」を味わえるように

内容を正しく読み取るための工夫

（例）



- ・活動の順番がわかるように、順序を表すことばを線で囲むようにした。
- ・何に対して動作（行動）するかを考えて読むことができるように、助詞「に」「を」を〇で囲み、矢印を描き込むようにした。

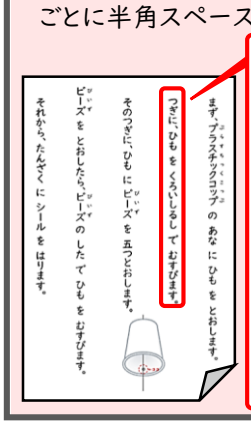
どうやって？

「AをBに」や「BにAを」が含まれた文を読んだ後に教師が動作化し、その後、自分でも動作をするようにし、「～を」から「…に」へ動作することに気づくようにした。そして、動作の方向に注目して読めるように、例のように、助詞「を」「に」を〇で囲み、「を」から「に」へ向けて矢印を描くようにした。教師のことばかけを聞きながら取り組み、徐々に支援を減らしていくと、自分で助詞に〇をつけ、動作の方向を示す矢印を描きこんで、正しく読み取り、製品を作ることができた。

主体的で対話的で深い学びの実現に向けた工夫

ポイント 分かち書きで読みやすく！

〇ことばの切れ目がわかりやすいように、また、助詞に注目しやすいように、文節ごとに半角スペースを入れた。



行間を程よく空けて書き込みをしやすく。

ポイント 友だちに聞いてみよう！

これまでは、わからない語句などがあると、教師に聞いていた。

先生、〇〇って何？

もっと生徒同士でかかわりあって、主体的で対話的な学びにしたいなぁ

それは、B君が知っていたよ。

はじめは、教師が、かかわりあうきっかけを作るようにした。

ありがとう。

それはね、▲▲のことだよ。

少しずつ、生徒同士で「〇〇って何？」などと聞きあう姿が見られるようになってきた。

気づき・改善など 考察

・題材が進むにつれて自分から進んで文章を読む姿が見られるようになった。これは、実際に説明文を読んで製品（簡単なおもちゃなど）を作るようにしたことで、文章を読むことのよさ（「説明文を読み取ってその通りに作業すると作ることができた」）を味わうことができたからだと考える。今後さらに主体的に学習を進めるようにするためには、段落ごとなど途中の段階で、見本と自分の作った物を見比べるコーナーを設けるなど、自分で正誤をチェックできる仕組みがあるとよいと考える。

・「あおいシールをあかいシールに はります」や、「あかいシールにくろいシールを はります。」を読んでシールを貼るとき、文の始め（「あおいシール」や「あかいシール」）を読むとすぐに、そのシールを手に取り、貼っていたことから、文章を読むときに名詞や動詞にのみ目が向き、助詞には注目出来ていないと考えた。そこで、3つ目のポイントに書いたように、動作の方向に注目することができるよう、文章を読んだ後にその内容を動作化したり、助詞「を」「に」を〇で囲み、「を」から「に」へ向けて矢印を描いたりするようにした。それによって、自分で説明文を読み、説明文が表す通りの製品を作ることができた。これらのことから、助詞に〇を付けたり、矢印を描いたりしながら読むことは、一つ一つのことばや助詞に注目し、動作の方向を理解して読み取ることに有効であると考える。